

日付:2015年2月8日／聖書:ルカによる福音書10:25～37

主題:「隣人を自分のように愛しなさい」

律法学者は、イエスの言う「隣人を自分のように愛しなさい」との意味が理解できなかった。「わたしの隣人とはだれですか」とイエスに問い直す。すると、イエスは譬えをもって「隣人」を示される。

追いはぎに物を奪われ、半殺しの目に遭ったその人を助けたのは、同じユダヤ人の祭司でもレビ人でもなかった。律法を重んずるがゆえに、怪我人を助けることをしなかった。病人、血に触れることは汚れることであり、罪を犯すことと定められていたからであろうか。しかしサマリア人は、その定めを越えて怪我人を助け、介抱したのである。律法学者に、「行って、あなたも同じようにしなさい」とイエスは投げかける。この後、イエスを試みる学者の反論は記されていない。もしかしたら、律法を軽んじるなんてもつてのほかだ、サマリア人だからこんなことが出来る、律法を重んじない行為は、真の愛、真の勇気ではなく「蛮勇」というべきものだ。…今朝の箇所からそう思われるこの頃であるが…。

先日、イスラム過激派組織に拘束され殺害された後藤健二さんの行為に対し、自民党副総裁の高村氏が、メディアを通じて「彼の行為は、真の勇気ではなく、『蛮勇』というべきものだった」と述べた。その発言は余りにも無神経である。後藤さんは決して自ら死に行ったのではない。後藤さんのシリアに入る前のビデオではっきり「私は死にません。私は必ず生きて帰ってきます」と述べていた。彼はクリスチャンである。いつもカバンには聖書が入っていたと言う。同じジャーナリストで友人の湯川さんが、過激派組織イスラム国に拘束された時に、誰も本気になって湯川さんを助けようとはしなかった。日本政府も動こうとしない。後藤さんは自分しかいない、何とか助けなければと、これまで培った様々なルートを通して救出に向かったのであろう。その後藤さんのことを何もしない日本政府が、「蛮勇」と言えるのか。ましてや、日本人2人が拉致されていると知りながら、安倍首相は年明けに中東に出向き、会見の席で「イスラム国と戦う周辺諸国に2億ドルの支援をする」と公言したのだ。この発言が、彼らを刺激し、今回の事件になったことはまぎれもない事実である。「隣人を自分のように愛する」ことの出来ない者に、後藤さんを非難することは出来ない。

そんな状況の中で後藤さんのご家族は、決して怒りを発するということはしない。この世は、怒りの連鎖によって暴力による報復が、この世の戦争の歴史を築いてきた。しかし、後藤さんのご家族は、その怒りの連鎖を断ち切っている。ここに真の勇気、真の平和の証しがあるように思う。主イエスの言葉に従った後藤さんを誰が責めることが出来るのか。今はただ主の御慰めを祈りつつ、怒りの連鎖を発しないご家族の真の勇気に、真の平和を受け継ぎたい。(神谷)